

# 『杜子春』 芥川龍之介

—

ある

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ほんやり空を仰いでいる、  
一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、

今は財産を費い尽くして、その日の暮しにも困る位、憐  
な身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といえば、天下に並ぶものがない、<sup>1</sup>

繁昌を極めた都ですから、往来にはまだしつきりなく、  
人や車が通つていました。門一ぱいに当つてはいる、油のよ

うな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗の帽子や、土耳其

の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱が、絶えず流

れて行く容子は、まるで画のよくな美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ほんや

もた

ようす

り空ばかり眺めていました。空には、もう細い月が、うら  
うらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思う程、かす  
かに白く浮んでいます。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もう少し行くつても、  
泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生  
きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつ  
た方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、「こんな取りとめもない」と  
を思いめぐらしていたのです。

するとどこからやつて來たか、突然彼の前へ足を止めた、  
片目眇すがめの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大  
きな影を門へ落すと、ちつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へているのだ。」と、横柄に言葉をかけま  
した。

「私ですか。私は今夜寝る所もないのに、どうしたものか  
と考へているのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏  
せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀そつだな。」

しづら

老人は暫く何事か考へてゐるようでしたが、やがて、往来にさしてゐる夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いことを一つ教えてやるう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に当る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

「ほんどうですか。」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の

月の色は前よりも猶白くなつて、休みない往来の人通りの上には、もう氣の早い蝙蝠が二三回ひらひら舞つていました。

二

とししゅん

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大

きな車にも余る位、黄金が一山出で來たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐには立派な家を買つて、

玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮しをし始めました。

げんそう  
れんりょう  
ぜいたく

蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉をとりよせる

やら、日に四度色の變る牡丹を庭に植えさせんやら、白

よたびいろ  
ほたん  
しろ

孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦を

くじやく  
たま  
りゅうがんにく

縫はせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を

じうぱく  
たま  
ぞうげ

あつら  
うわさ  
4  
逃ぐるやら、その贅沢を一々書いていては、いつになつ

ても「」の話がおしまいにならない位です。

すると「」、「」、尊を聞いて、今まで路で行き合つて

も、挨拶さえしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて  
きました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内  
には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜  
子春の家へ来ないものは、一人もない位になつてしまつた  
のです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開  
きました。その酒盛りの又盛んな」とは、中々口には及ば  
ました。  
またさか

れません。<sup>い</sup>極かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、<sup>てんじく</sup>天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれないと、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いづれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏<sup>そう</sup>しているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限<sup>めのう</sup>がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏<sup>ひすい</sup>になりました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日來た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸<sup>さしあ</sup>すという家は、一軒もなくなつてしましました。いや、宿を貸す所か、今では椀に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つて

いました。するとやはり昔のよう、「片田 眇すがめ」の老人が、  
どこからか姿を現して、

「お前は何を考へているのだ。」と、声をかけるではあり  
ませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いた儘、  
暫しばくは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切  
そうに、同じ言葉を繰返しますから、「おひらも前と同じよ  
うに、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へてい  
るのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀かなそうだな、ではおれが好い」とを一  
つ教えてやる。今「の夕日の中へ立つて、お前の影が地  
に映つたら、その胸に当る所を、夜中に掘つて見るが好い。  
きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈はずだから。」

老人は「いつ言つたと思つと、今度も亦人ひと」みの中へ、搔  
き済すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返り

たちま

また

ました。と同時に相變らず、仕放題な贅沢をし始めました。  
庭に咲いてる牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、そ  
れから刀を呑んで見せる、天竺<sup>たつじゆ</sup>から来た魔法使いすべてが  
昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいあつた、あの 稔<sup>おび</sup> ただ しい黄金も、又三

年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまつました。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをも  
とにしています（一部加工しています）。

「青空文庫」 <http://www.aozora.gr.jp/>